

## 遊びのプログラムと 子どもの参加・参画

### ◆ 安部芳絵

工学院大学教育推進機構教職課程科 准教授  
厚生労働省社会保障審議会児童部会  
放課後児童対策に関する専門委員会 委員  
今後の地域の児童館等のあり方検討ワーキンググループ 構成員  
厚生労働省委託事業  
児童館等における「遊びのプログラム」の開発・普及に係る調査  
研究業務 企画委員

児童館は子どもの権利の拠点として、最善の利益、つまり子どもにとって一番よいことを保障する場です。このとき、おとなが勝手に「子どもにとって一番よいこと」を決めるのではなく、子どもの意見を聴いて一緒に考えていくことが大切です。だからこそ、児童館と子ども参加は切っても切り離せないものといえます。

子ども参加支援のモデルとしては、ロジャー・ハートの「参加のはしご」(1992)が有名です。はしごという形状から、上を目指すことが重要だと思われがちですが、そうではありません。ハートはこれらの数字はおとなが「子どもたちのグループが自分たちの選んだどのレベルでも活動できるような状況をつくり出せるようにするためのもの」だといいます。そして、子どもの中には主体的に活動を始めることはしないが、優秀な協力者である者もいるとして、多様な形でのかわりを示唆しています。

さて、「参加のはしご」に触発された子ども参加の実践者・研究者はいろいろなモデルをつくりました。ジョンは「参加の橋づくり」(1996)、ホールダーソンは「参加の輪」(1996)、フランクリンは「参加の11段階」(1999)、ドリスケルは「子ども参加の諸側面」(2002)です。これらはそれぞれ特色があってももしろいのですが、なかでもフランクリンはハートの指摘した「非参加(1あやつり、2お飾り、3形だけ)」を「プレ参加」として位置づけました。このプレ参加は、見方によっては参加の準備段階とも言えます。たとえば児童館の夏祭り、初年度は職員がほとんど決めていたとしても実際に経験した子どもたちが年長になっていくにつれて子どもが提案し、主体的に動く姿を目にすることがあります。

ところで、参画と参加ってどうちがって、児童館ではどちらを目指せばいいのでしょうか。参画は「この指止まれ!」と指を出す子ども、参加は

それに集まる子どもたち、のイメージです。児童館で子ども参画が求められるのは、あらゆる場面で子どもに関わることについては発言していい／かかわっていいということを示すためであって、発言を強制するためではありません。ですから、参画が素晴らしくて参加はだめ、というものでもありません。

子どもは、遊びを通して参加を体現します。指に止まって遊びはじめ、時に離脱し、また加わることを繰り返します。初めから最後までずーとかかかわっていなければいけない遊びはもはや遊びではありません。参加という言葉のもつ「スキマ (=あそび)」の要素がここに 있습니다。

そう考えると、児童館職員がまず目指したいのは、遊びを中心とした子どもの参加を大切にしつつ、ふとしたつぶやきを運営や事業全体の子どもの参画へつなげる視点を持つことです。「屋上で遊びたいなあ」「すごい長い流しそうめんやりたい…」そんなひとことから子ども企画が始まることもあるでしょう。施設の運営を見直すきっかけになることもあるかもしれません。児童厚生員の腕の見せ所です。

児童館における子ども参加・参画の種は、子どもの遊びのなかにこそあります。

